

東大寺法華堂の伝日光・月光菩薩像

一、はじめに

東大寺法華堂に安置される伝日光・月光菩薩像は、天平時代の彫刻のなかでも屈指の優品であるにもかかわらず、それが何の像か不明であり、寺家ではこれを仮に日光菩薩・月光菩薩と称して現在に至っている状態である。

名無しの像とは、美術的な価値から言っても恥ずかしいことであり、微力ながら私も何とかしなければならぬと、長年の間関心を持ち続けて来た。そうこうするうちに、中国の資料のなかよりたまたまこの問題にヒントをあたえるものを見出し、それによる私見の一端を簡略な執筆文のなかに触れたこともあった。¹⁾

しかし、これについてのまとまった研究は、まだまとまるとりあげたことがないので、ここに若干の紙面を借りて短文を発表し、改めて識者の批判を仰ぎたいと思う。

二、法華堂の諸像

毛 利 久

周知のように、法華堂には伝日光・月光像を含めて十四軀の天平彫刻が伝存しており、その内訳は塑像五軀と乾漆像九軀とに分かれる。まず伝日光・月光像をとりあげると、ともに塑造、等身大より少し



図1 東大寺伝日光像



図2 東大寺伝月光像

大きい立像であり、前者二〇七・二cm、後者二〇四・八cmの高さとなっている。当初は全体を美しく彩色していたらしいが、いまは剥落が甚しい。

さて、両像は素材ならびに形相の上からいっても、表現の特色から考えても、もともと一具像であったことは疑いないであろう。いまも不空羂索観音像を本尊として安置する八角仏壇の上に、あたかも左右の両脇侍のような格好で配置されている。

法華堂には、そのほかの塑像として執金剛神立像の名品がある。これは東大寺の草創期に奈良東山に建てられていた金鐘寺の重要な尊像であった可能性もあり、東大寺塑像群のうちで最も古い像と考えて大過ないであろう。彫刻の系統としては次に述べる東大寺戒壇院四天王

像ならびに法華堂伝日光・月光像と同類であるが、時期的にはそれに先行するものと見てよからうか。

なおまた吉祥天と弁財天の両立像が、塑造で、大破しながらも厨子のなかに残存している。この破損像二軀は構造や表現などから見ても一具のものだったと見なされる。

以上にあげた諸像のほかに、法華堂の塑像と切り離せないものが戒壇院に伝存する塑造四天王立像である。とくに広目天と多聞天の両像が怒りの表情を示しながら、悠久のかなたを凝視するかのような深く静かな眼差を向けるのは、伝日光・月光像の思索的な相好に通じるものがあるとも言えよう。これらの法華堂と戒壇院の塑像には、がらうい密接な関係があったと考えられる。

戒壇院の四天王像が最初どこに安置されていたかを知ることがむづかしい。堀池春峰氏⁽²⁾や山本栄吾氏⁽³⁾などの研究によれば、この四天王像はもと大仏殿回廊の西にあった中門堂に安置されていたのを、享保十七年(一七三二)戒壇院建立の際に修理移座したものであるが、この像は実は寺門より下賜されたもので、東大寺ほんらいの像ではなかったこともあり得る。もしこのような推察が許されるとすれば、四天王像と同系の伝日光・月光像もまた、必ずしも当初から法華堂にあったものとは考えられない。

さらに吉祥天・弁財天両像が一具としての製作であることは先に述べたとおりである。両尊を含む一具像として天平時代に行われた法儀

は吉祥悔過であり、それは釈迦如来の左に吉祥天（功德天）を配して本尊とし、なおもし余裕があれば、釈迦の右に弁財天および四天王を置くこともある（隋灌頂『国清百録』第一所収「金光明懺法」、宋遵式『金光明懺法補助儀』）⁴。現存する吉祥天・弁財天像は、このような一具像を構成する二体であり、おそらく法華堂とは別の堂に安置されていたと思われる。総じて顔付は豊富ななかにも清楚な品位を失わず、その点おだやかな表情の伝日光・月光菩薩像などの造形とはやや異なるものがある。

以上は法華堂と戒壇院の塑像九軀について、伝日光・月光像を中心に関係事項を概観してみた。その結果、執金剛神像を除く八軀すべてが法華堂当初の像とは考えられないことが知られた。ただ執金剛神像のみは、そのかなり信憑性のある由緒から考えても、初期金鐘寺と関係深い像と考えるのが妥当であろう。

次に乾漆像の方は法華堂に安置する九軀がすべてである。その内訳は本尊不空羂索観音像一軀、梵天・帝釈天像二軀、四天王像四軀、金剛力士像二軀となる。いずれも体内空洞の乾漆像であり、多少の異論はあるにせよ、ほぼ同じところに、同系の作家によって造立されたと見るのが無難である。従って法華堂は本尊以下かなり大きな乾漆立像九軀を安置していたことになるが、これが当初からの状態であったかどうかなお問題は残るであろう。

三、伝日光・月光像の尊名と性格

両像の尊名については、現在一般に日光・月光と呼ばれるのが普通のものである。国宝の指定名称も「塑造日光仏立像」とされている。

ところがこの名称は、元禄十年（一六九七）ころに成ったと考えられる『東大寺諸伽藍略録』に「日光月光、各御長六尺九寸立像、土軀同（行基）作」と記載されていて、近世前期あたりにすでに使用されていたことが知られる。安永三年（一七七四）刊行の『奈良名所記』にも「脇士日光月光」の記事があり、そのような伝承が現在まで続いていると考えるべきであろうか。日光・月光とは、がんらい薬師如来の脇侍菩薩であるはずであり、それがここに出て来るのは不審でもある。

伝日光・月光像に関しては、もう一つこれを梵天・帝釈天と呼ぶ説が明治時代から行われている。最初の主張者は黒川真頼であり、⁵続いて高山樗牛・岡倉天心・和辻哲郎などの美術家がこれに同調している。おそらく大袖の衣をまとうて杳をはき、頭髮をきれいに結いあげて立つ伝日光・月光像の姿が、何となく梵天・帝釈天に似ていて、このような説を生むに至ったのであろうか。

以上二つの尊名をあげたのであるが、そのまま首肯できるものではない。そこで私は別の観点からこの問題に楔を入れて、ほんらいどのような性格の像であったかを、まず探究してみたい。最初に両像の形



図3 東大寺伝日光像上半身

相について記述しておけば、南面する法華堂本尊の左右に立つ像は、東が日光菩薩、西が月光菩薩と呼ばれるものである。

伝日光像は菩薩風の顔付で、佇立合掌する。頭髮を束状にして頂上に結びあげ、菊花形の飾りを刻んだ冠帯を頭部に巻く。耳朶に孔を貫する。着衣は左前に合わせ、筒袖の下衣に大袖の寛衣をまとい、帯を締め、袈裟を左肩からかける。足に沓をはく。

伝月光像も大略これに類似するところが多いが、ただ袈裟をかけたのは大きな違いと言えよう。そのほか伝月光像独特のものとして、腰に巻いた紐が正面において美しく結んで垂れ、さらにその上の胸腹部中央に帯・菊花形・襟の縁どりなどによる気のきいた意匠があらわ



図4 東大寺伝月光像上半身

されている。

さてこのような伝日光・月光像のいわば図像的な分析を試みた結果、どのようなことに注目されるであろうか。箇条的に記してみると、次のような二項になると思う。

(1)すでに記したように、両像は一具となるものであるが、どちらも両手合掌の姿であるから、おそらく中心的な像があって、それに対して両像が左右に分かれて合掌礼拝する姿が想像される。

(2)しかしこの場合、左右の両像はともに菩薩風の一般的な顔付であるが、服装の方は、伝日光像が袈裟で体を被うのに対して、伝月光像の方は袈裟が無く、簡略ながらもかなり洗練された服飾を示している。その点、この両像は一般の仏菩薩とは多少性格を異にして、比較的自

由な造形が許されていた面もあったと見るべきであろうか。

しかしこのように見て来ても、両像の尊名を推定することは依然として困難と言うほかないが、像の性格については臆気ながら理解できる点も出て来たように思う。そこで疑問を解くべき他の作品資料の有無を中心に、もう少し探究の輪を広げてみよう。

四、縁覚像の提唱

関係資料としてまずとりあげられるものが、金剛峯寺に伝存する木造諸尊仏龕（枕本尊）一基である。これは空海が唐より請来したものと信じられ、白檀製で、高さ二三・一cmの小龕像である。その構造は、頭部を丸く削った八角筒形を前後に二等分し、その一つをさらに二等分して、これら三材の内側に諸尊を細かく彫刻し、蝶番によって三材を連結する。三龕は開閉自在となる。

まず中龕は、仏坐像を中心とし、その左右に脇侍菩薩が立って三尊を形成する。後に僧形の声聞が三体ずつ分かれて左右に立ち、さらにいちばん奥に左右一体ずつ立つのが、いわゆる縁覚像であろう。そのほか下方に金剛力士・香爐・獅子・樂天その他の付属的な彫刻が配される。

左龕は半跏形の菩薩を中心に、脇侍菩薩二体と声聞二体を左右に分けて立てる。残りの左右に一体ずつ立つのが縁覚らしくも見えるが、

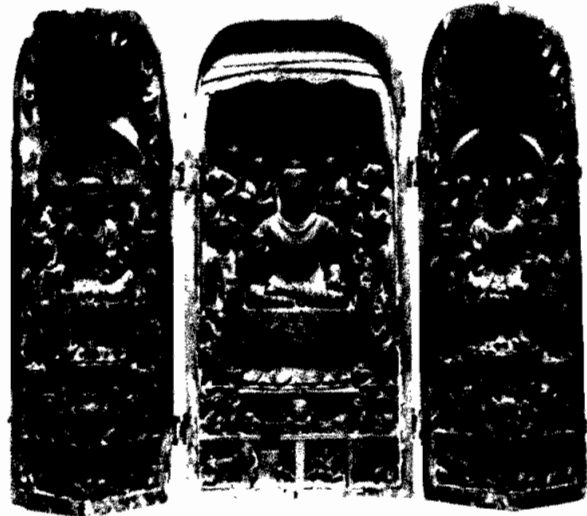


図5 金剛峯寺龕像

しかし中龕あるいは右龕のそれと比べると、すこし異形のようにも見える。この点は次に中・左右の三龕を一括して記述する。なお下方に付属的な香爐・礼拝者・獅子・鬼形などを配置する。

右龕は半跏形の中尊菩薩・二体の脇侍菩薩・二体の声聞が左龕とほぼ同類のものである。残りの二体は、左龕の二体よりも、むしろ中龕の縁覚と推定される二像に近似する。この右龕にも左龕と類似の付属的な彫刻が施される。

この三龕は言うまでもなく仏あるいは菩薩の浄土を具体的にあらわしたもので、いずれも中尊（仏か菩薩）・脇侍菩薩・縁覚・声聞その他によって構成される。これらの主要構成像は、合計すれば中龕が十一体、左右両龕がそれぞれ七体となる。すなわち総計二十五体のよくまとまった群像と言えよう。

さて私たちがここで最も関心を持つのが、やや聞き馴れないかもしれないが、縁覚と称する像である。縁覚とは、がんらい十二因縁を観察して迷いを断ち、理を悟ることであるが、さらに人の能力に応じて悟りに導くことを教え、これを菩薩・縁覚・声聞の三乗に応じた教えと言う。すなわち縁覚は菩薩と声聞との中間に位置するものと見られ、それは像形の上にも自らあらわれる。

そこで、この龕像にあらわれる縁覚について特徴を指摘すると、ほぼ次のようになる。

(1) これまでの叙述で分かるように、中龕と右龕の像はまず縁覚像と見なして間違いないと思うのであるが、その姿は合掌形で、敬虔な仏徒としてつくられている。

(2) 相好は温雅であり、頭上に螺旋状の髪を束ねているのが異風である。なおこれに関して一言すれば、宝髻のみ螺旋状髪とし、地髪を素地とする例は古くインド・マトウラ派の像にあり、また中国の魏塑と言われる麦積山石窟（六四号・九〇号）その他にも見出される。⁶⁾ そのほか、宝髻を螺旋状に束ね上げるとともに、地髪に縦線を刻むもの

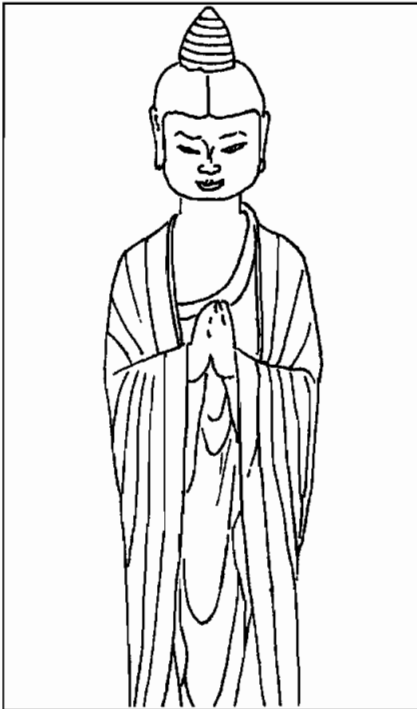


図7 麦積山90号像図

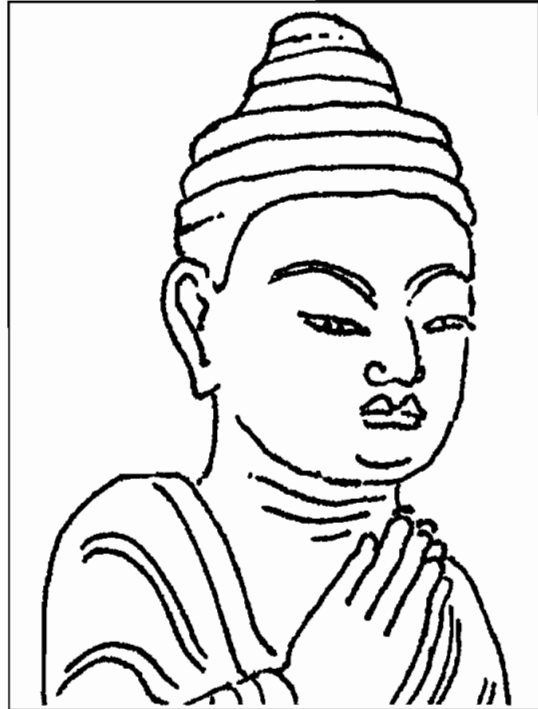


図6 金剛峯寺龕像縁覚図



図8 麦積山121号像図

(一一一)もあり、いろいろなバリエーションを生み出したものと思われる。

(3) 龕像の着衣は一部しかあらわれていないが、おそらく両肩を被う、袖の広い寛衣であったと見られる。その参考となるものが麦積山石窟にもあり、例えば上記の六四号・九〇号・一一一号などの諸像のように縁覚系の頭髪を示す像は、ゆったりとした通肩の寛衣をまとっている。なおまた、これらの像は身体に何の装飾もつけないのが特色であり、菩薩と声聞の間であって、ひたすら仏道に精進するいわゆる縁覚の真姿をあらわすものと見たい。

(4) ここで問題になるのは、左龕において縁覚のいるべき場所に上記のような縁覚像が無くて、その代りに菩薩風の像が左右に配置されていることである。すなわち、この両像の姿は上方へ梳った頭髪を中ほどで結び、胸飾と天衣をつけ、両手合掌する（ただし左側の像は手先

を欠失するか）。この姿は縁覚というよりは菩薩に近い。しかし菩薩とすれば、この左龕にのみ縁覚が無いのは不審でもある。強いて言うならば、縁覚の性格が菩薩や声聞などと比べて、多少明確を欠く点があったためかもしれない。果してそうだとすれば、このような縁覚表現があってもおかしくないし、これをあえて菩薩風の縁覚像と呼ぶこともできるであろう。要するに、縁覚像については必ずしも厳格な儀軌的規制があったとは思われない。

縁覚像の特徴は大略以上に述べたとおりである。中国では東魏・北齊・隋のころに七尊像が盛行したが、これは一般に中尊・両脇侍菩薩・両縁覚・両声聞の七体によって構成される。金剛峯寺の龕像は石窟寺内部を小さく模したものとされ、その左右両側の群像がそれぞれ七体一具となっているのは、おそらく上記七尊像と同類のものであろう。その点から言っても、先に問題とした左龕の菩薩風の像は縁覚と見なすべきものに相違ない。なお中心となる中龕では、声聞四体が増えてにぎやかな十一体の群像になっている。

最後にもとに戻って、法華堂伝日光・月光像の正体と尊名について結論を出しておかねばならない。これまでに考察したところからすれば、両像は比較的簡素な寛衣をまとい、沓をはいて合掌する姿で、いわば俗体の敬虔な求道者としてつくられている。両者一具像ではあるが、袈裟は一方だけがかかるという、かなり自由な造形が見られる。これらの点を他の縁覚像と比べれば、伝日光・月光像には縁覚像とし

ての要素が少なくないように思われる。ただ縁覚像に多く見られる螺旋状の頭髮が両像に無いのは、作者が現存像のような束状に結った頭髪の方をふさわしいと見たためであろうか。そこにこの種の造形における日本化ということも考えてよいであろう。伝日光・月光像の静安典雅なつくりは日本人好みであり、当初はこれが縁覚像として群像表現の重要な一翼をになっていたに違いない。法華堂の伝日光・月光像は、ほんらい縁覚像としてつくられたものと考えたい。

上記のような七尊像のなかに含まれる縁覚像は、金剛峯寺の龕像が伝来の確実な古作であり、小品とはいえ、依拠できるものである。中国においては、古くから仏像を三尊・五尊・七尊その他のにぎやかな群像形式で安置することが流行し、そのさまざまな作例は石窟寺院や龕像・碑像などに数多くのことされている。日本でも、密教弘通以前において、大陸の影響を受けて群像をつくることがあり、寺院の資財帳や古記録などにその一端をうかがわせるものもある。伝日光・月光像が推測どおり縁覚像であったとすれば、このすばらしい両像を含む群像が、ある時期に、どこかのしかるべき堂内に安置されて、靈妙な仏国浄土を現出していたことは疑いないところであろう。

注

- (1) 毛利久『天平彫刻』（昭和四十五年 小学館）。
(2) 東大寺『東大寺』（昭和二十年 京都印書館）。

(3) 山本榮吾「東大寺戒壇院四天王像の前所在」（『大和文化研究』五一六）昭和三十五年。

(4) 町田甲一「吉祥悔過の法儀と東大寺塑像群に関する試論」（『芸術学会研究紀要』1）昭和二十九年。

(5) 黒川貞頼「東大寺法華堂仏像考証」（『國華』一五七・一五九・一六〇）明治三十六年。

(6) 文化庁社会文化事業管理局『麦積山石窟』（一九五四 北京）。

(7) 水野清一・長広敏雄『響堂山石窟』（昭和十二年 東方文化学院京都研究所）。